

科学研究費助成事業（学術研究助成基金助成金）研究成果報告書

平成25年 6月10日現在

機関番号：24402
研究種目：若手研究（B）
研究期間：2011～2012
課題番号：23760615
研究課題名（和文）対馬の近代建築に関する調査研究

研究課題名（英文）Study on Modern Buildings in Tsushima

研究代表者

倉方 俊輔（KURAKATA SHUNSUKE）
大阪市立大学・大学院工学研究科・准教授
研究者番号：30597224

研究成果の概要（和文）：本研究では、長崎県と朝鮮半島の間位置する島である対馬（長崎県対馬市）全域の悉皆調査を行い、これと特徴的な地域や遺構種別に関する4つの個別研究——近代遺構の地域的特色、厳原市街地の煉瓦造遺構の成立基盤、浅藻地区旧漁業倉庫の実測調査、鰐浦のコヤの形成原理と近代の変容——を併せることで、これまで明らかで無かった対馬の近代遺構の地域的特質の一端を明らかにした。

研究成果の概要（英文）：This study is intended as an investigation of modern remains of Tsushima island (Nagasaki Prefecture) which located in the middle of the Korean Peninsula and Kyushu. Little attention has been given to the point. By survey and research, we have to clear some of the regional characteristics of the modern remains of Tsushima.

交付決定額

（金額単位：円）

	直接経費	間接経費	合 計
交付決定額	3,400,000	1,020,000	4,420,000

研究分野：建築史

科研費の分科・細目：建築史・意匠

キーワード：建築史・意匠、日本史

1. 研究開始当初の背景

対馬は九州の北方、玄界灘にあり、長崎県と朝鮮半島の間位置する島である。縄文時代から日本列島と大陸の交通の要地であり、古代以来から中世にかけては国防や貿易の最前線として重視された。近代に入ると、明治4年の廃藩置県によって中世以来約600年にわたる宋氏の対馬支配が終わり、明治5年に府中城（現厳原）に熊本鎮西鎮台が駐屯するなど、国境の防備を固めるための要塞島として推移した。第二次世界大戦終結以前の対馬は、人・物・情報の自由な往来が制限されていたがゆえに、古くからの文化的状況が温存されていたといえる。このことから第二次世界大戦後、東亜考古学会調査（1948）、九州大学古文書調査（1950）、九学会連合調

査（1950-51）を嚆矢として、対馬に関する本格的な学術調査が実施され、中でも、九学会連合調査の内容は同調査に参加した民俗学者・宮本常一の『忘れられた日本人』（1960）などを通じて人口に膾炙し、中世の習俗を残す対馬のイメージを人々に印象付けた。その後も現在まで、特に考古学や中世文化史の分野で活発な研究がなされている。

しかしながら、近代の遺構に関しては、軍事遺構と近世以前の形態を色濃く残す民家・集落研究を除き、基礎的な所在確認もほぼ実施されていない。全国的な近代建築の悉皆調査として『日本近代建築総覧』（1980）が知られているが、同書およびその後の補遺調査でも、対馬はまったく扱われていない。長崎県教育委員会による総合調査でも同様

で、『長崎県緊急民家調査報告書』（1972）は木造の民家のみが対象であり、『長崎県近代和風建築総合調査報告書』（2004）もほぼ同じであり、『長崎県近代化遺産総合調査報告書』（1998）が調査対象としているのは砲台跡やトンネルがほとんどである。幸うじて厳原の中心市街地に関して、対馬市教育委員会『まちなみ景観建造物等調査事業報告書』（2005）で数棟が報告されているのみである。

しかし、実際に対馬を歩けば、木造の商家や煉瓦造の倉、鉄筋コンクリート造の工場など、意匠的にも構法的にも興味深い建築を各地で発見できる。これらは対馬が経験した特有の近代を物語る生き証人である。地理的条件に根ざした各集落の展開を知る上で大きな手がかりとなりうる。

同時に実感するのは、あと十年もすれば、以前の建物の使われ方に関する聞き取りが困難になるであろう事実である。対馬の人口は1970年には58,672人であったが、2010年には34,116人と過疎化が進行している。高齢化も深刻である。最盛期のまちや建築の情報を持っている住民にいま聞いておかないと、残された建築の背景が不明になってしまうだろう。

2. 研究の目的

研究期間の2年間に島内の悉皆調査を終え、詳細調査と文献調査と併せて、対馬の近代建築の地域的特質を見出すことを目的とする。悉皆調査と、4つの個別研究の目的はそれぞれ次の通りである。

- (1) 悉皆調査：これまで全島の実踏調査が行われなかった対馬全域に関してこれを実施し、物件をリスト化して、地域・時代・建築種別などの特徴を考察する基礎とする。
- (2) 近代遺構の地域的特色：悉皆調査を基に、近代遺構の地域的分布と社会変化との関連を、当時の新聞記事を中心とする文献調査と併せて分析することによって、対馬の歴史と遺構の分布の関係性を明らかにする。
- (3) 厳原市街地の煉瓦造遺構の成立基盤：厳原は近世には府中と称して町並みが整えられ、現在に至るまで対馬の中心的な町として発展してきた。城下町としての町割りには万治2（1659）年・寛文元（1661）年の大火以降に本格化し、現在の都市の骨格が形成された。武家屋敷には防火の役割を兼ねて石堀が巡らされ、これらは今も中村地区や宮谷地区を含む馬場筋通り沿いに残存して、特徴的な景観をつくり出している。こうした近世期からの遺構に関しては戦前期から言及され、近年は中村地区で町並み環境整備事業が行われるなど、行政と住民の双方に認知されているといえる。その一方で、厳原市街地には、煉瓦を使用した壁や建物といった構築物を多く見ることができる。これらもまた歴史的遺

構の一つであり、当地の歴史・環境と関連を持つことが考えられるが、これらを扱った調査研究はこれまで見ることはできない。現地調査をもとに、厳原市街地における煉瓦造遺構の現存状況を報告し、文献資料や聞き取り調査と合わせて、当地の歴史の中にその成立を位置づけることを目的とする。

- (4) 浅藻地区旧漁業倉庫の実測調査：対馬における近代遺構の代表例として、これまで本格的な報告がなされていなかった浅藻の旧漁業用倉庫について実測調査を行い、その特徴を明らかにする。

(5) 鰯浦のコヤの形成原理と近代の変容：対馬には「コヤ」と呼ばれる倉庫を、母屋と別に建てる習慣がある。幾度となく起こった大火による被害を抑えるために、貴重品をコヤに分散させ、保管したことが起こりとされるが、利用法は多岐にわたり、生活に密着して活用されている。最も広範にコヤが残る集落の一つである鰯浦を対象に、一様に見えて多種多様でもあるコヤがどのような経緯で形成されたのかを明らかにし、特に近現代における変容に迫る。

3. 研究の方法

- (1) 悉皆調査：対馬島内の集落をすべて訪ね歩き、調査票を作成した。実見と聞き取りにより、建物名、所有者、所在地、建築年代、規模・構造、設計者、施工者等を調査票に記入した。特に重視するのは関係者の証言であり、所有者以外の複数の市民に対し、時間をかけて聞き取りを行った。これらは以前の使われ方や建設の背景、集落の成り立ちなどを示し、各集落間の差違や共通性を明らかにすると考えられるからである。位置情報等は地図上にプロットし、総合的な把握を行いやすくした。

(2) 近代遺構の地域的特色：実踏調査、ヒアリング調査の結果をもとに、国立国会図書館所蔵の「対馬新聞」や税関資料など、対馬の近代史に関する資料調査と併せ、分析した。

- (3) 厳原市街地の煉瓦造遺構の成立基盤：現地で実踏調査、ヒアリング調査を行い、厳原市街地における煉瓦造遺構の保存状況と住民の意識を調査した。対馬市教育委員会『まちなみ景観建造物等調査事業報告書』（2005）で報告されているものもこれに含めた。すべての遺構の保存状況などを記録し、特徴的なものについては実測調査を実施した。これを『厳原町史』や煉瓦造に関連する史料を中心によって分析、位置づけを行った。

(4) 浅藻地区旧漁業倉庫の実測調査：現在の所有者の同意を得て、実測を行い、図面化する。同時に聞き取りを通じて、こうした煉瓦造遺構が建設された背景を示した。

- (5) 鰯浦のコヤの形成原理と近代の変容：現地での実測調査と聞き取り調査、および文献

調査を行った。対馬のコヤに関する優れた既往研究として、小林久高「長崎県対馬市における伝統木造構法の特性：平柱を用いた架構法を中心として」（学位論文、2008）がある。同論を参考にしながら、現在の活用状況の調査と地図・地積図の分析を通じて、特に近現代における変容を解明した。

4. 研究成果

(1) 悉皆調査

旧上県郡（旧上対馬町、旧上県町、旧峰町）の中で 29 件、旧下県郡（旧厳原町、旧美津島町、旧豊玉町）の中で 36 件の遺構を拾い上げ、竣工年や背景などについてそれぞれ可能な限り聞き取りを行った。個別研究における考察のために、特徴的な石造・煉瓦塀や一部の戦後遺構も調査対象に含めてリストアップを行った。

(2) 近代遺構の地域的特色

まず、対馬の近代遺構の背景として、時代順に次のファクターが重要な役割を果たしたことを、文献調査などから明らかにした。

①要塞化：近代の対馬は、国防の最前線として要塞の建設が進められた。要塞の周辺では要塞地帯法により、建設行為に対して制限が設けられた。

②道路網の未発達：国防上の理由から大規模な道路開発は第二次世界大戦後まで見送られた。

③船の近代化：下関と釜山を結ぶ航路が対馬を経由することがなくなり、対馬が交通網から取り残された。

④北部の朝鮮貿易：対馬北部は、朝鮮米の輸入をはじめとした朝鮮貿易や韓国併合時の買い物や医療といった日常的な関係という形で、朝鮮半島との関係を第二次世界大戦以前は持ち続けた。

⑤東沿岸部の豊漁：昭和 20～30 年代に対馬西海岸ではイカとサバの豊漁期が訪れた。この当時西海岸の港には島外船が押し寄せ、漁獲の大半は島外船によるものであり、商業などの興隆を見た。

⑥真珠養殖：大正 10 年に北村真珠が開業し、一時は低迷したものの、真珠養殖は現在まで対馬の主要産業の 1 つとなった。真珠養殖は企業が地元民を雇用することで浅海湾を中心に広まっていった。

次に、以上のファクターと個別の遺構とのつながりを示すと共に、鉄筋コンクリート造、煉瓦造、木造モルタル塗の 3 つの特徴的な構造・構法の分布から、地域の特徴と近代史との関係を包括的に検討した。

鉄筋コンクリート造のものとしては佐賀の遺構が特徴的である。昭和 30 年代に建てられたそれらは元々商店や飲食店として使用されており、豊漁期に島外からの漁民に対

して商売を行い、活況を呈していた時期の遺構としての価値がある。

煉瓦造と木造モルタル塗については、全島を通じて以下のような分布を示す。

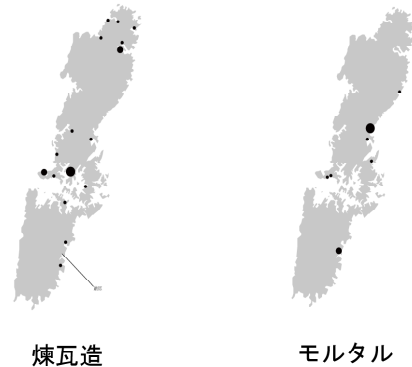


図1 煉瓦造遺構と木造モルタル塗遺構の分布

煉瓦造構造物は北部と浅海湾周辺の立地が目立つ。それぞれの歴史的背景と併せ、北部では朝鮮貿易、浅海湾周辺では真珠養殖との関連のなかで煉瓦造の建築物がこの 2 つの地域で広まった形跡を示す。木造モルタル塗は東沿岸部に多く分布している。これらの用途は商店や飲食店が多く、佐賀の鉄筋コンクリート造遺構と同様に島外漁民に対して商売を行っていた状況を反映している。

(3) 厳原市街地の煉瓦造遺構の成立基盤

近代の新材料として、対馬では生産されなかった煉瓦が使われていることに着目し、厳原における煉瓦造遺構（住居の一部・倉庫・壁など）の分布を精査し、明治 10 年代に建設された監獄・工場や火災との関連を考察して、城下町の変容を示した。

調査の結果、全部で 77 件の煉瓦造遺構が厳原市街地に存在することが明らかになった。約 6 割は河口部の商業・港湾地域に分布する。77 件中の 24 件が川端通り沿いに、また 24 件が金石川と大町通りに囲まれた地域に存在している。その一方で、中村地区や宮谷地区を含む馬場筋通り沿いの地域には 1 件のみしか確認されない。煉瓦造遺構は、近世に武家地として形成された地域ではなく、近代に商業・港湾地として発展した河口部に多く存在していることが分かる。

構築物の種別としては、現在、建物外壁と



図2 厳原市街地の煉瓦造遺構の分布

して用いられているものが 45 件、敷地境界に塀として建つものが 23 件、煉瓦蔵が 4 件、井戸 2 件、ほこら 3 件となり、建物外壁として成立ないしは残存しているものが過半を占める。建物外壁として用いられているもののうち 10 件は煉瓦によるうだつであり、10 件中 7 件が川端通り沿いに集中している。

このように煉瓦による構築物が河口部に集中して見られることは、近代に入ってから、の当地の商業の活性化に対応すると考えられる。近代に入ってから、町人地であった低地部は港町として発展し、明治 38 年には対馬で初めての上水道施設が国分・今屋敷・大手橋の 3 地区に竣工するなどした。

煉瓦は島外から移入されたと考えられる。歴史的にこれをみると、資料から確認される厳原市街地の最初の煉瓦造遺構として、明治 14 年に現在の市役所の地に建設された厳原監獄がある。続く大規模な煉瓦造遺構としては、明治 20 年頃に現在の交流センターの地に建設された江口合名工場が挙げられる。こうした近代初期における大規模な煉瓦造建築物の成立が、当時の人々に煉瓦という新素材を印象付け、煉瓦の移入を促進したと推定される。

以上の煉瓦造遺構は大火に対する近代的な対応として捉えることができる。厳原は、強い海風を受ける地形である。その上、17 世紀以降、人口の増加に伴って狭い地域に家屋が密集し建ち並んでいた。そのため度々大火が発生し、近世にはその対策として石塀がつくられた。近代に入っても明治 41 年、大正 5 年 2 月・6 月の 3 度大火が記録され、いずれも河口部で発生している。前述の通り、河口部は町人地であり、馬場筋通り沿いとは異なり石塀がつくられていない。そのため新たな防火対策が講じられたと考えられる。

厳原に多く見られる煉瓦造遺構は、これまで脚光を浴びてこなかったが、近代になって導入され、厳原河口部の繁栄の中で展開し、近世に生まれた石塀の風景とも深い関連性を有している。大火の対策として近世と同様に構築されたものであり、当地で地震が少なく、積むという文化が生じ得た背景も共通している。現在も石塀と同様に取り壊されず、外壁として利用した活用形態からも、一定の継承性がみられ、対馬の歴史を物語る近代遺構として捉えられる。

(4) 浅藻地区旧漁業倉庫の実測調査

厳原以外の煉瓦造遺構の代表的なものとして、浅藻に残る大正期の旧漁業倉庫について実測調査を行い、図面化した。

遺構が立地する浅藻は明治以降、島外の漁師の仮泊地として利用されるようになり、山口県久賀の漁師が定住した。遺構は当地で旅館や魚の専業運搬などを行っていた市丸氏

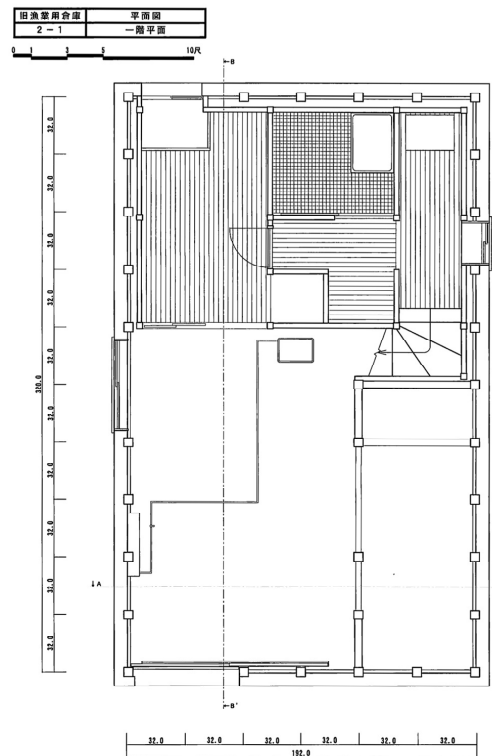


図3 浅藻地区旧漁業倉庫 1 階平面図

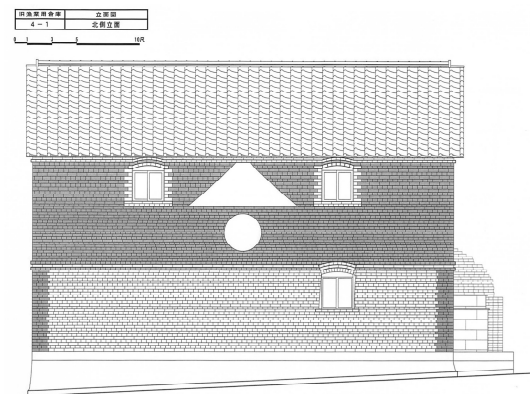


図4 浅藻地区旧漁業倉庫北側立面図

によって建設された。正確な竣工年は明らかではないが、大正期と考えられる。聞き取りにより、現在の所有者に移ったのは昭和 35 年であり、魚の保冷库として昭和 42 年頃まで利用されていたことが分かった。以後は特に 2 階部分を住居向きに増改築して、現在も用いられている。

遺構は近代に新たに島外から定住した集落において、煉瓦を移送して建設されたものであり、意匠的・構法的な工夫と併せて、対馬の漁業の隆盛を象徴するものであることが明らかとなった。

(5) 鰐浦のコヤの形成原理と近代の変容

漁村集落の近代のありようの代表例として、対馬北部の鰐浦のコヤの現状を実測し、

地図・地積図と照らし合わせて分布の変容を考察し、それとコヤの意匠・構法的特徴との連関を考察した。

実測の結果、鰐浦の集落では159棟のコヤの存在が確認された。うち、139棟が海の近くに密集し、残りの20棟は住宅の敷地内や、道沿い、山際に点在している。このうち前者にあたる139棟を集合として捉え、一つ一つを実測して、規模・階数・壁仕上げ材・束石・トモフサギの様式・用途の類型化を行った。

用途による分類を確認すると、用途と立地との関係性が見られる。漁業道具を入れるコヤは海に近いところ、ヒョウモンゴヤ（海草・穀物のコヤ）は共同作業場であるベードコの近くによく見られる。これらに比べて、衣類や日用品を入れるコヤはコヤ群の内部にある傾向にあった。同類の構造を持つコヤであっても、立地に適した用途で活用されていた。

利用の変化については、昔と比べるとコヤの利用は大幅に減少したことが判明した。ヒョウモンゴヤについては、現在は麦の栽培が行われておらず、海草類もすぐに買い取ってくれるためにあまり用いられていない。米についても、どこでも買えるために保管が少ない。コヤの利用の減少のもう一つの理由として、漁協の貸倉庫が建設され、車で利用が一般化したこともある。

コヤ群の形成と変容に関しては、鰐浦の中央の道は戦後まで存在せず、この道が完成したことで移動させられたコヤが存在することが、編年的な地図などの分析から明らかになった。こうしたコヤの移動性は、調査当時に実施されていた橋梁工事においても確認され、コヤ群の配置が柔軟に変化する背景となっている。

戦後のコヤ群への影響としては、区画割が挙げられる。コヤやベードコは元々共有地にあったが、土地が区分され、個人個人の所有に変わった。この区画割りがコヤそのものに与えた影響を顕著に示しているのがコヤの改造である。これによって、突出部の追加や複数のコヤの一体化といった、現在見られるような多様性が後押しされている。

外装材の多様性については、コヤのメンテナンスを各人で行っていた時代から、外部に委託する傾向が高まったことも一因となっている。トタンやスレート材といった簡易な素材から、新建材などの使用へと移行している。

鰐浦のコヤ群を詳細に検討した。それによって、コヤ群が時代や環境に適合して、立地や形容や様相を変化させていったことにより、現在の多様な姿となったことが明らかとなった。加工しやすく、移動できるというコヤの潜在性が、こうした近現代の変容の背景に存在する。

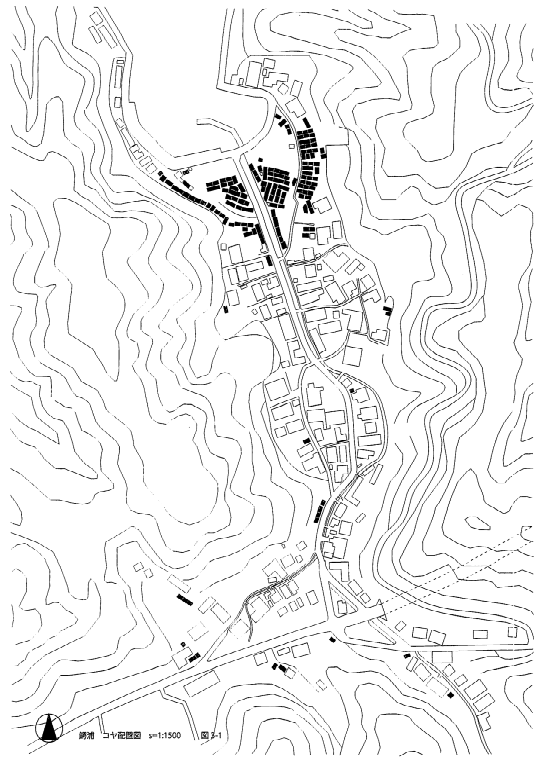


図5 鰐浦におけるコヤの分布現況

5. 主な発表論文等

（研究代表者、研究分担者及び連携研究者には下線）

〔学会発表〕（計1件）

- ①塩原裕樹、倉方俊輔、厳原市街地における煉瓦壁・煉瓦建物の成立基盤について、日本建築学会大会（東海）、2012年9月12日、名古屋大学

6. 研究組織

(1) 研究代表者

倉方 俊輔 (KURAKATA SHUNSUKE)

大阪市立大学・大学院工学研究科・准教授

研究者番号：30597224